

女子美術大学アート・デザイン表現学科 3年次・選択

メディアクリエーション演習 (〈インタラクティブ〉 特別授業)

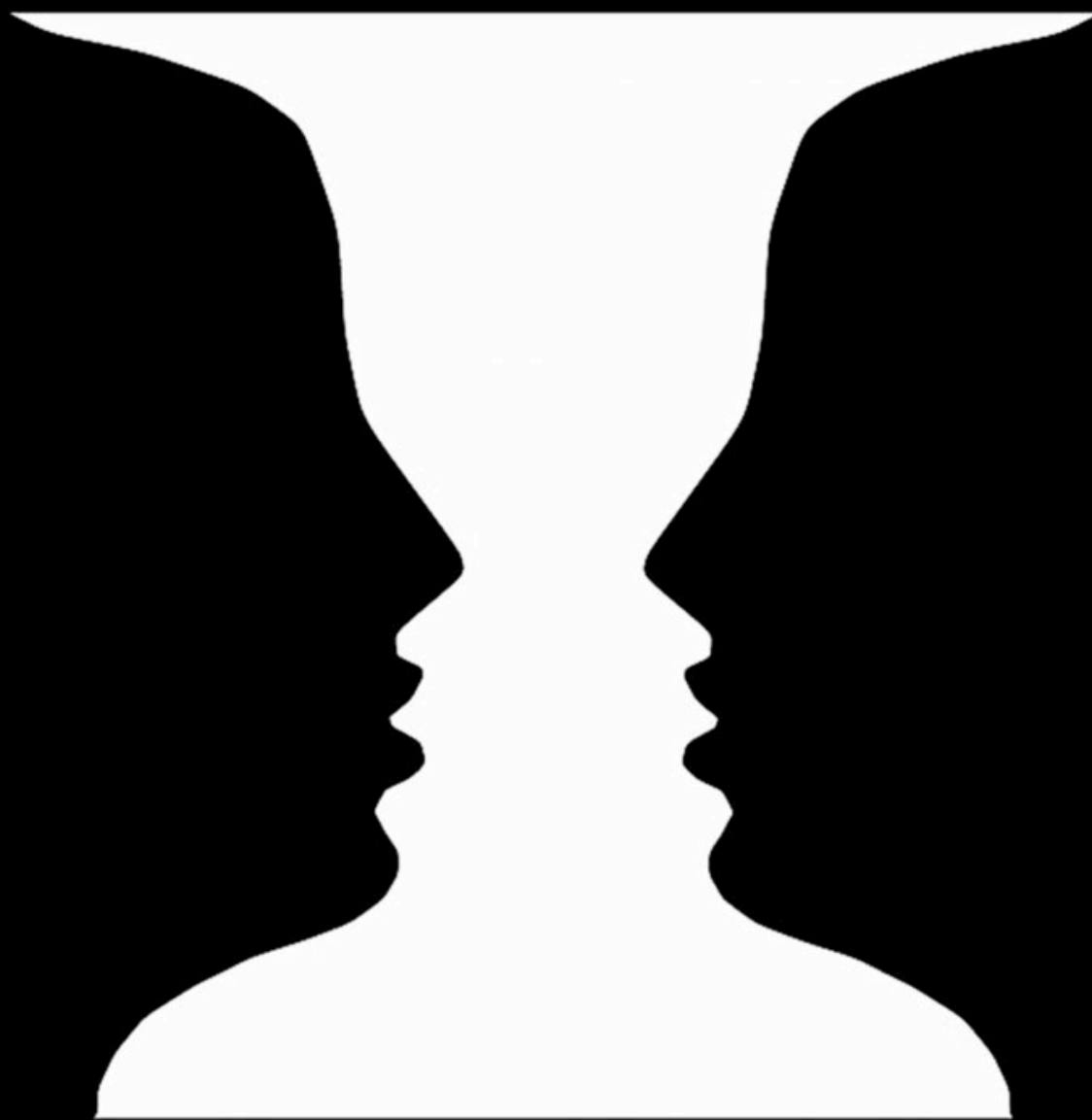
講義第2回 〈近代主義的世界観〉とは
～わたしたちの今日の問題の根底にあるもの

(第2回：2015-11-13)

担当： 石井 拓洋

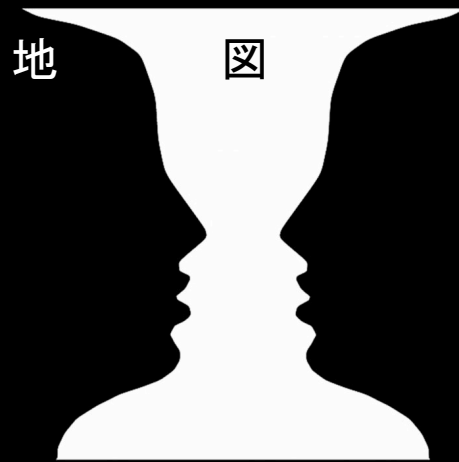
ishii05042@venus.joshiabi.jp

2015



「ルビンの壺」(多義図形)

<http://d.ibtimes.co.uk/en/full/1426245/rubins-vase.jpg?w=736>



- ・ ものごとは、一方に「図」があれば、かならずもう一方に「地」がある。
- ・ 「図」と「地」が共存することによって、はじめて全体が成立する。相互依存的である。
- ・ 「図」または「地」のうち、一旦いずれかに着目すると、もう一方が見え難くなりがちだ。
- ・ 「図」と「地」には優劣はない。存在としての水準は同程度である。

Ex.) 強者と弱者、中心と周縁、役にたつものと役にたたないもの、新しいものと古いもの、順境と逆境、男と女、陽と陰、、、

Text に沈むようにして読むこと、それは徹底的に教わることである。
しかし Text は考えつつ問う者にしか教えない。

それは或る意味で自問自答になる。それを少し広げる手がかりが
古くからの註解であり、ともに読む人の意見である。

しかし、また、text に沈まなくてはならない。
深く沈んで底流を知る者のみが、[※日常の生活へと] 浮かび上がったときに違う風景を見る。
それだけ進んだのであろう。

また [※ さらに再び] text に沈むようにして読まなくてはならない。
こうしてまた [※ Text から] 浮かびあがる。

このようにして形成されてくる風景に text の射程が見えてくる。

【授業について】

- 社会や文化を考える上で重要な論点の幾つかを確認する
- “Text” に深く「沈み」、そして「浮かぶ」授業
- 金曜日・週1回・全7回
- 「講義」と「実習」（「インタラクティブ」作品制作とは別）

【 授業目的 】

- 次年度の卒業制作作品の〈充実〉
- とくに制作理念面での〈充実〉

〈充実〉のために、、、

- 〈世界認識〉にかかわる 代表的論点の確認
- 近代的イデオロギーとしての「芸術」を相対化する視点
- 芸術の本質としての「ミメーシス」(模倣) 説の確認

【講義内容】

- なぜインタラクティブ性がもとめられるのか？
- 世界の見方 : 「近代」と「現代」
- 作品の見方 : 「批評理論」の基礎
- 「ミメーシス」mimesis (模倣) の理念の確認

【実習内容のねらい】 (実験的だが、、、)

- “Text” と「作者」に深く「沈む」。感じ入る。
- 作品内部に秘めた、概念としてのインタラクティブ
- 詩のテキストを、音の3要素の側面から〈模倣〉
- 詩のテキストの「文脈」を活かした〈模倣〉

【実習内容】 (実験的だが、、、)

「詩」と「音」と「映像」の共生の実験

- 背景画像とテキストが適宜現れる映像を作成
- 詩の世界を模倣する自然音や背景音楽を付す
- テキストを〈模倣〉mimesis して作成した旋律を付す

木

お花が散って
実が熟れて、

その実が落ちて、
葉が落ちて、

それから芽がでて
花が咲く。

そうして何べん
まわったら
この木は御用が
すむかしら。

金子みすゞ

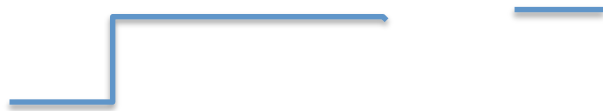


音の3要素「音高、音の強さ、音色」。

リズム、構成感、内容の反映

例

お花が散って



実が熟れて、



旋律線
イメージ

その実が落ちて



葉が落ちて、



金子みすゞ「木」冒頭2連より

ジャン=ジャック・ルソー (*Rousseau*, 1712 – 1778, 仏) 思想家、作曲家。
『言語起源論』 (1781刊行) で 言語の模倣による音楽を提唱した。



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Allan_Ramsay_003.jpg

「たとえ音と音との関係や、和声の法則を、千年も計算したところで、この芸術をどうやったら模倣の芸術にすることができるだろうか。

そのいわゆる模倣の原理がどこにあるのだろうか〔略〕。

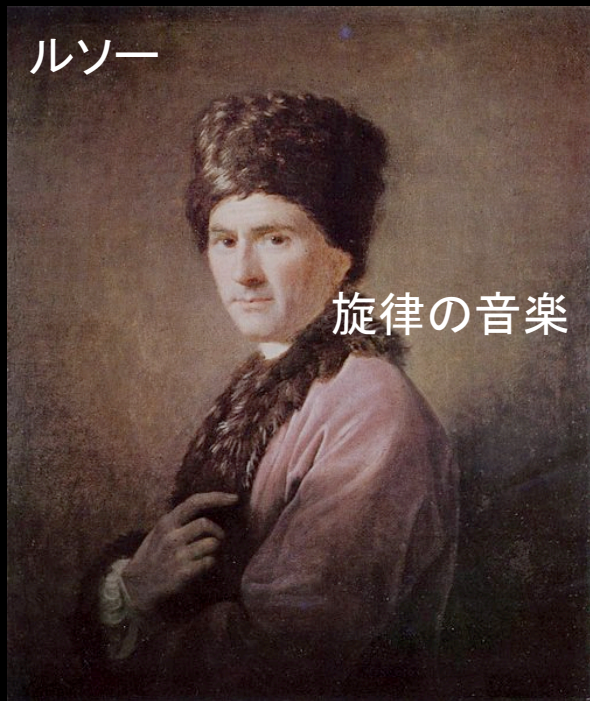
旋律は音声の抑揚を模倣することによって、嘆きの声、苦しみや喜びの叫び、脅し、うめき声を表している。情念の音声的な記号はすべて、旋律の領域に属している。

旋律は言語のアクセントと、魂の動きに対するそれぞれの固有な語法の中にあるこった言い回しとを模倣する。それはたんに模倣だけではなく、語りかける。

〔略〕生き生きとして激しい、この情熱的な言語は、話言葉そのものよりも百倍も力を持っているのである。

ここから音楽的な模倣の力が生まれ、ここから感じやすい心に対する歌の支配力が生まれるのである」

ルソー



旋律の音楽

Vs.

ラモー



和声の音楽

「1752年以降、ルソーとラモーとの間に繰り返される中傷合戦とも言える論争は、最終的、音楽の基礎であり音楽の表現力を決定するのは、旋律かそれとも和声か、という問題に集約されていく」
〔片山、関本、安川 32頁〕

この論争後、ラモーの和声論が勝利し、ルソーの音楽模倣論は忘れ去られる。

【実習内容】 (実験的だが、..)

- ・ 「詩」と「音」と「映像」の共生の実験
- ・ 作品内部でのメディア間のインタラクティブ

(※ 一つのイメージとして)

【Youtube】宮沢賢治 21世紀映像童話集 やまなし

<http://www.youtube.com/watch?v=JcaGlc7hYIc>

童謡詩人 金子みすゞ さんについて

【なぜここで、いきなり 「詩」 なのか？】

- 音楽は本来、詩 (ことば) と 共にあったと考えるから
 - 近代的 「自律音楽」、「自律芸術」 批判の立場から
- 詩こそ 「ミメーシス」 が反映したものであるから
 - (典拠) アリストテレス 『詩学』 (前4世紀)
- 「ムーシケー」としての統合、調和的な音楽の再考
 - 近代的 「自律音楽」、「自律芸術音楽」 批判の立場から

【なぜ 金子みすゞ なのか？】

- 〈人間と自然との共生〉をうたうものとして
 - 「私と小鳥と鈴と」など。 脱二元論的な〈自然の精神性〉へのまなざし
- 近代日本の女性表現者としての生きざま
 - 男性中心主義的 (近代的) な中での困難
- 韻律やことばの量 が音楽を想起しやすい
 - 詩と音楽との融合を想起しやすい

本日のメニュー

- 【講義第2回】 〈近代主義的世界観〉の確認
～ 作品制作コンセプトにいたる問題意識をもつヒント

- 【実習】 金子みすゞの詩の世界にふれる

【講義第2回】 〈近代主義的世界観〉の確認
～ 作品制作コンセプトにいたる問題意識をもつヒント

時代区分としての「近代」とは？

きんだい 【近代】

2. (modern age) 歴史の時代区分の一。広義には近世と同義で、一般には封建制社会のあとをうけた資本主義社会についていう (広辞苑 p.733)。

中世
↓
近世

11C頃 「封建社会」
17C頃 「絶対王政」を経過

(主従関係)



↓
近代

18C末 「フランス革命」
「市民社会」の成立 (封建社会の打破)

(自由と平等)

近代主義 modernism とは

近代主義 (※ modernism)

社会的・文化的構造を 宗教的権威や道徳的規範に立脚しながら構築しようとする **伝統主義と絶縁し、〈世界の合理化〉という普遍原理 (※ 科学) に基づいて社会や文化の建設を推進**しようとする精神的態度のこと。

したがって、、、

秩序よりも進歩が、宗教よりも科学が、個別主義 (※具体) よりも普遍主義 (※抽象) が、属性原理 (※ 身分など) よりも 業績主義 (※ 実力) が尊重され鼓吹される。

封建社会から資本主義社会への進化・発展の駆動力の一つが、**この種の エートス (※ 持続的 特徴) であった、、、、。**

(平凡社 『世界大百科事典 7』 高橋徹 pp.630-631)

近代主義 modernism とは

近代主義

- ・ 秩序よりも進歩
- ・ 宗教よりも科学
- ・ 個別主義 (※具体)よりも普遍主義 (※抽象)
- ・ 属性原理 (※身分など)よりも業績主義 (※実力)が尊重

封建社会から資本主義社会への進化・発展の駆動力の一つが、この種のエートス。

「この種のエートス」
(持続的な特徴)

=

啓蒙主義 的特徴
(蒙きを啓らむ, くらきをあきらむ)

• 啓蒙思想 Enlightenment

- 17Cから18Cの西欧における旧弊打破の革新的な思想
 - 合理的**理性**を尊重し、**進歩主義**を標榜をした
 - 理性的思惟によって**宗教的権威**や**王侯貴族に抵抗**した
 - 政治、教育を通して人間生活の**幸福の増進**を理念とした
 - **基本的人権** (自然権 = 人が生まれながらに有する権利) の萌芽
 - その成果は『**百科全書**』 (ディドロら編, 1751-80) に編纂
-
- 「キリスト教・王侯貴族」のためから、**「市民」のための生活へ**
 - 啓蒙思想が「近代」を導いた

「物心二元論」

デカルト



- 西洋中心主義
- 進歩主義
- 人間中心主義 (個人主義)
- 要素還元主義
- 機械論

各項目は相互に関わりあっている

文明の大発展 ⇔ 「人間」と「自然」の分離_{など}

ルネ・デカルト (1589 - 1650) Rene Descartes

それまでの中世のスコラ学、神学を批判して、合理的探究 (科学) の基盤をつくった



画像 : <http://www.ghc.usp.br/server/Sites-HF/Fabio-Ardito/>

- 「私は考える、それ故に私は有る」 (哲学的思考の出発点)
- 神の合理的な存在証明 (証明の目的 = 人間の認識能力の正確さを担保するため。ただし証明に難あり)
- 精神と物質の「物心二元論」へ (精神と身体、人間と自然、あらゆる二項対立が派生)

啓蒙思想のルーツ

「私は考える、それ故に私は有る」 (哲学的思考の出発点、『方法序説』1637)

“Cogito, ergo sum” (コーギト・エルゴ・スム)

Q. 一体、この世で確実に存在すると言えるものは有るのか？

A. 全ての存在を疑いつくしている、この〈疑っている私〉の存在を、私は疑えない。

(〈私の存在〉を疑うとしても、〈疑っている意識〉が確かにある。無からは何も生じない。だから疑う意識が生まれるのは「私」が存在する証拠だ)

「自分が真理を語っていることを私に保証しているところの

『私は考える、それ故に私は有る』という命題のうちには、

考えるためには存在しなければならぬことを私はきわめて明白にみる、

ということ以外には何ものも無いことをみとめた」

(デカルト「第4部」『方法序説』落合太郎訳、岩波文庫[青613-1]、1953年初版、p.46)

つまり、すくなくとも「主観」は確かに存在する。

神の合理的な存在証明 (デカルトの神の存在証明への疑問は多いが、、、)

- ・ 確実なる存在の「私」の中には「神の観念」もまた存在する。
↓
- ・ そもそも「無からは何物も生じない」。つまり <不完全>からは<完全>は生まれない。
↓
- ・ ところで、神は<完全>だ。
↓
- ・ 一方、私は<不完全>なので、<完全>なるものであるはずの「神の観念」は創れない。
↓
- ・ つまり、「神の観念」とは、私達が創ったものではなく、「神」から与えられたものである。
- ・ したがって、私達が「神の観念」を持っているのならば「神」は存在せねばならない。

物心二元論と近代主義の要素

精神と物質の「物心二元論」へ (精神と身体、人間と自然、あらゆる二項対立が派生)

「神が存在することは“証明”された。われわれを作ったのは神である。

とすると、人間のもつ認識能力は『歪んだ能力』ではありえない。

なぜなら神は完全な存在でありしたがって欺瞞者ではないからだ。

だからわれわれは、明瞭判明に認識されるものをそのまま「客観的実在」であると

信じていい。こうデカルトは言うのだ」

(竹田青嗣『自分を知るための哲学入門』ちくまライブラリー47、1990年、p.138)

つまり「主観」と「客観」なるものはそれぞれ存在する

物心二元論と近代主義の要素

精神と物質の「物心二元論」へ

(精神と身体、人間と自然、あらゆる二項対立が派生)

「主観」

「客観」

精神 ←→ 物質 (延長)

精神 ←→ 身体

人間 ←→ 自然

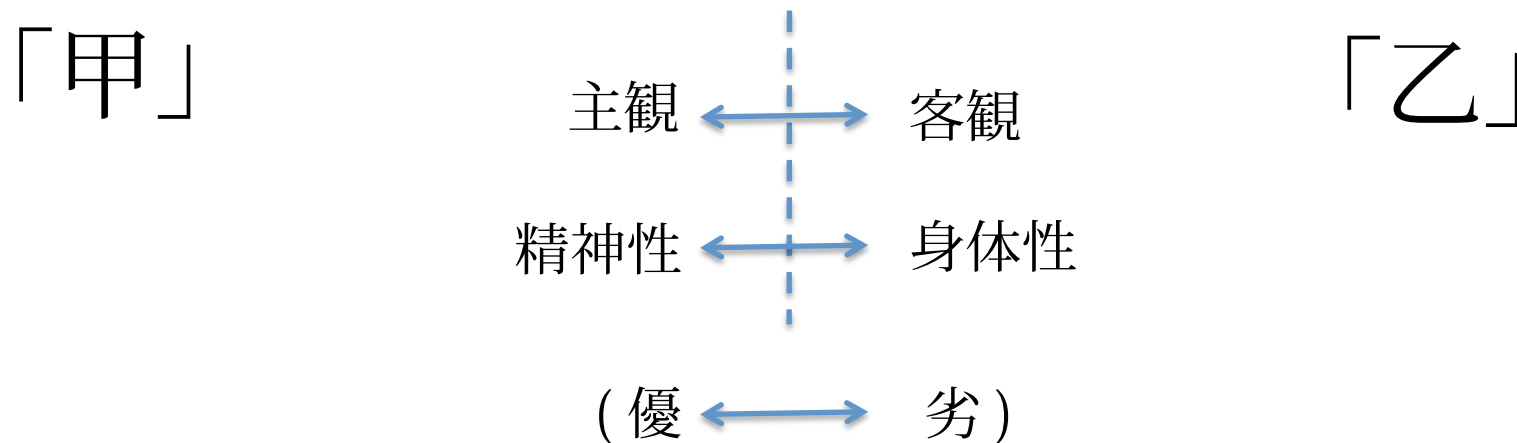
さらに

生 ←→ 死

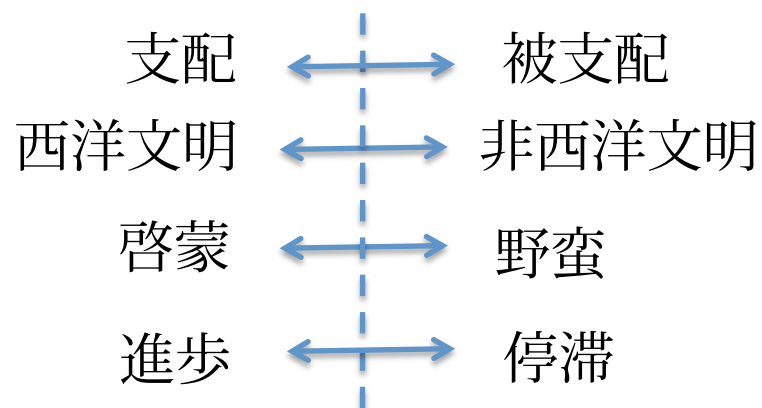
優 ←→ 劣

物心二元論と近代主義の要素

分断的な「物心二元論」から「二項対立」的な近代的世界観の形成



果ては、、、



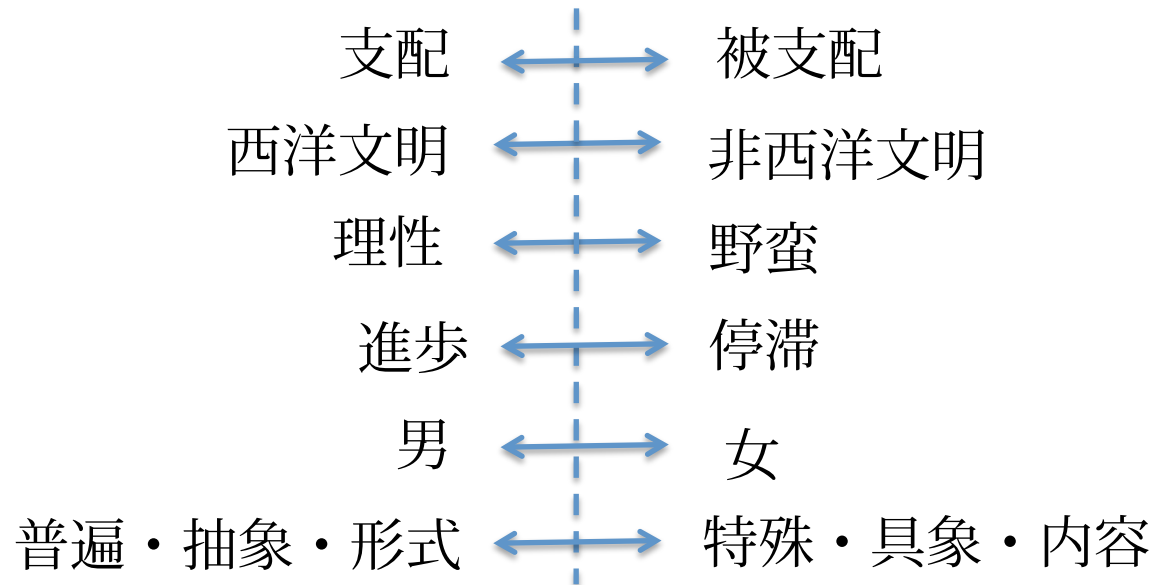
物心二元論と近代主義の要素

「二項対立」的な近代的世界観の形成

「優」

ついに、、、

「劣」



- ・ 「優・劣」を導き、不要な対立・衝突をうみやすい。
- ・ その「二項」以外に視野が限定されがち。問題が暴力的に単純化される。

「物心二元論」

デカルト



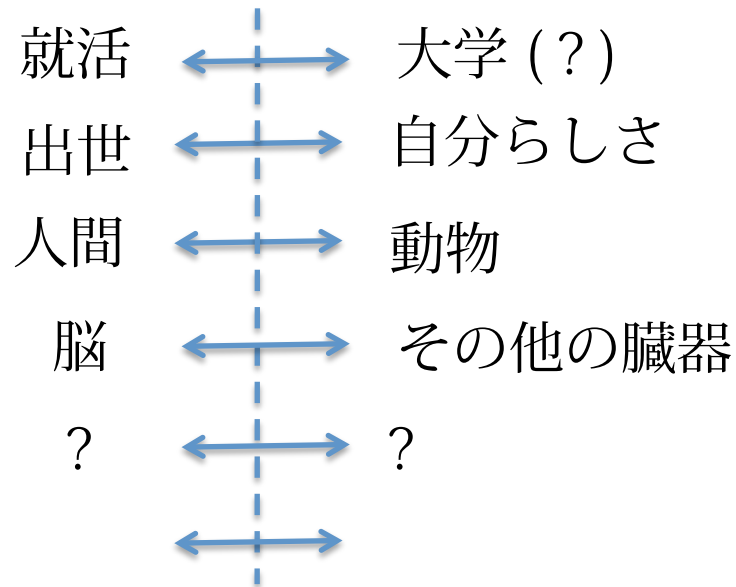
- 西洋中心主義
- 進歩主義
- 人間中心主義 (個人主義)
- 要素還元主義
- 機械論

各項目は相互に関わりあっている

文明の大発展 ⇔ 「人間」と「自然」の分離_{など}

身近な「二項対立」をさがそう

「優」



「劣」

- 「優・劣」を導き、不要な対立・衝突をうみやすい。
- その「二項」以外に視野が限定されがち。問題が暴力的に単純化される。

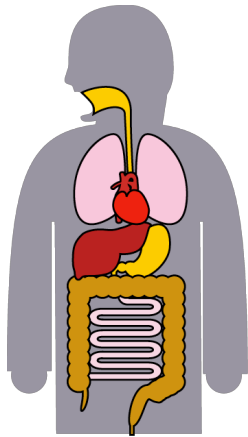
- その問題は、しかし、本来「二項対立」的に考えるのが適当なのか？
- 対立以外の把握の仕方・視点はないのか？ 共生・調和・均衡・脱構築

「要素還元主義」：近代主義的世界観の要素としての

「要素還元主義」 分析力が向上。しかし、全てに有効か？さらなる〈分断〉も

「私の研究しようとする問題のおのをおのを、できうるかぎり多くの、
そして、それらのものをよりよく解決するために
求められるかぎり細かな、小部分に分割すること」

(デカルト「第二部」『方法序説』落合太郎訳、岩波文庫[青613-1]、1953年初版、p.29)



画像: http://bsoza.com/ill_medical/body02_a05.htm

Q. 人間の体の仕組みを知りたい

- 各臓器ごとに分割して取り出して考える
- 各臓器が持つそれぞれの機能を把握する
- 分割した各臓器を再び組み合わせる。元通りになる。

「科学」

しかし、把握可能か？本当に元通りになるのか？
本来、全体の中でこそ機能していたのでは？

参照 「2対6対2の法則」「アリの法則」(2割が生産的、6割は普通、2割が非生産的。しかし、、、)

「機械論」：近代主義的世界観の要素としての

「機械論」 科学は自然の営みの制御・予測が可能か？

機械論 mechanism

自然界の諸現象を、靈魂や内的目的などの目的論的な概念を一切用いずに、作用因のみによって作動する機械とのアナロジーに基づいて解釈しようとする決定論的な、かつ還元主義的な思想。

(横山雅彦「機械論」『岩波・哲学思想事典』岩波書店、p.303)

異常気象・大地震・大噴火、あるいは核エネルギー、、、
自然のスケールは、人間よりも遥かに大きいのではないか？

「進歩主義」：近代主義的世界観の要素としての

「進歩主義」 科学の発展、進歩は、人間の幸福につながるのか？歴史は存在するのか？

「 進歩的思想という、もっとも広い意味での啓蒙 が追求してきた
目標は、人間から恐怖を除き、人間を支配者の地位につけるということ
であった。しかるに (※ = にもかかわらず)、あます所なく啓蒙された地
表は、今、勝ち誇った凶徴 (※ = 凶を示すもの) に輝いている。

(ホルクハイマー&アドルノ (1947=1990) 『啓蒙の弁証法』 岩波書店、p.3)

二度の大戦争、ナチスの蛮行、核兵器による大虐殺。
また、現代のインターネット環境など、科学の発展は
楽観的に明るい未来を約束するものなのか？

ただし、単純な近代批判は危険

● ただし、安易な「近代批判」を慎む

- 近代主義の恩恵を把握し、慎重に省察する姿勢が必要
 - 楽観的な一元論・融合（あまりに単純なる「自然回帰」 etc..）
 - 「未完のプロジェクト」ハーバーマスの視点
- 「近代」の省察には、われわれの住む世界に関する、果てしない「インプット」がまずは必要。

近代を乗り越える視点 とは？ （たとえば、、、）

- 進歩主義の再考
- 二元論の克服を試みる視点 (共生・共存の視点)
- 人間中心主義、西欧中心主義への批判的検討
- 人間と自然の関係に関する再考
- マイノリティに対するまなざし
- 「実在論」から「関係論」へ

※ 以降の講義でさらに考えてみたい

近代を乗り越える視点 とは？ （金子みすゞさんの事例）

小澤次郎氏 (2011) 「金子みすゞの詩にみる構造：二項対立を超えた荘厳世界」
詩と試論研究会編 『金子みすゞ：み仏への祈り』 勉誠出版、pp.11-30.

上記のすぐれた論文をはじめ、多くの識者らは、金子みすゞの詩の世界に
近代的な二項対立を超える世界へのまなざしを指摘している。

以降では、この論文をもとに、その内実を探ってみたい。

金子みすゞさんのまなざしを確認することには、
われわれは、女性の視点をいかした脱近代的なアプローチの視点の持ち方一端を
知ることができる点において大きな意義があると考えます。

近代を乗り越える視点 とは？ （金子みすゞさんの事例）

小澤次郎（2011）「金子みすゞの詩にみる構造：二項対立を超えた荘厳世界」 p. 26

- おうそう【往相】

「〔仏〕此土(しど)から浄土へいくこと。⇔ 還相」

- おうそう えこう【往相回向】

「自分の功德を一茶の衆生にめぐらし施して、共に浄土に往生できるように願うこと。
浄土真宗では阿弥陀如来が、極楽に往生する〔ための〕功德を衆生に施すとする
⇔ 還相回向」

- げんそう【還相】

「〔仏〕極楽浄土に往生した後、再び衆生教化のためにこの世に戻る。⇔ 往相」

- げんそうえこう(還相回向)

「浄土に往生した後、この世に戻って一切衆生を教化し共に往生すること。浄土真宗では、その能力も弥陀の力によるものとする。⇔ 往相回向」

(広辞苑より)



画像: wikipedia「金子みすゞ」より

- ・ 金子みすゞ (1903 – 1930)
- ・ 童謡詩人
- ・ 代表作
 - 「おさかな」
 - 「私と小鳥と鈴と」
 - 「こだまでしょうか」
- ・ 享年26歳

大漁

朝焼小焼だ
大漁だ。
大羽鰹の
大漁だ。

浜は祭りの
ようだけど
海のなかでは
何萬の
鰹のとむらい
するだろう。

金子みすゞ



朗読：竹下景子『永遠に残したい日本の詩歌大全集1・金子みすゞ詩集』ポニー・キャニオン：PCCG-01281 (CD)、2012年発売。
画像：「写真AC」 <http://www.photo-ac.com/>

おさかな

海の魚はかわいいそう。

お米は人につくられる、
牛は牧場で飼われてる、
鯉もお池で麩を貰う。

けれども海のおさかなは、
なんの世話にもならないし、
いたずら一つしないのに、
こうして私にたべられる。
ほんとに魚はかわいいそう。

ほんとに魚はかわいいそう。

金子みすゞ



私と小鳥と鈴と

金子みすゞ

私が両手をひろげても、
お空はちつとも飛べないが、
飛べる小鳥は私のように、
地面を速くは走れない。

私がかからだをゆすつても、
きれいな音はでないけど、
あの鳴る鈴は私のように、
たくさんな唄はしらないよ。

鈴と、小鳥と、それから私、
みんなちがつて、みんないい。



こころ

金子みすゞ

お母さまは
大人で大きいけれど
お母さまの
おこころはちいさい。

だって、お母さまはいいました、
ちいさい私でいっぱいだって。

私は子供で
ちいさいけれど
ちいさい私の
こころは大きい。

だって、大きいお母さまで、
まだいっぱいにならないで、
いろんな事をおもうから。

朗読：竹下景子『永遠に残したい日本の詩歌大全集1・金子みすゞ詩集』ポニー・キャニオン：PCCG-01281 (CD)、2012年発売。
画像：「写真AC」<http://www.photo-ac.com/>

蓮と鶏

金子みすゞ

泥のなかから
蓮が咲く。

それをするのは
蓮ぢやない。

卵のなかから
鶏が出る。

それをするのは
鶏ぢやない。

それに私は
気がついた。

それも私の
せいぢやない。

主な参考文献・さらなる知識のために

菅原教夫 (1994) 『現代アートとは何か』 丸善ライブラリー

佐々木健一 (2004) 『美学への招待』 中公新書

長尾達也 (2001) 『小論文を学ぶ：知の構築のために』 山川出版社

山下和也 (2013) 『システムという存在』 晃洋書房

姜尚中 (2003) 『マックス・ウェーバーと近代』 岩波文庫

渡辺裕 (1997) 『音楽機械劇場』 新書館

小澤次郎 (2011) 「金子みすゞの詩にみる構造」 詩と試論研究会編 『金子みすゞ：み仏への祈り』 勉誠出版

片山千佳子、関本菜穂子、安川智子 「ダランベール著 『ラモー氏による理論的・実践的音楽の基礎原理』 に関する考察」 『東京藝術大学音楽学部紀要』 第34集、2009年、東京藝術大学。

ルネ・デカルト (1637 = 1953) 『方法序説』 落合太郎訳、岩波文庫 [青613-1]

ホルクハイマー&アドルノ (1947=1990) 『啓蒙の弁証法』 岩波書店

松宮秀治 (2008) 『芸術崇拜の思想』 白水社

ルソー (1781=1970) 『言語起源論』 小林善彦訳、現代思潮社

以上